関ヶ原　島津の退き口

—敵中突破 300 里—

関ヶ原　古戦場　島津義弘公　陣跡

関ヶ原　島津の退き口－敵中突破 300 里　学研新書（桐野作人著）

関ケ原　誰が大合戦を仕掛けたか　PHP 新書（光武誠著）

読んで大部分引用しました。

関ヶ原　島津の退き口ー敵中突破300里　学研新書（桐野作人著）

関ケ原　誰が大合戦を仕掛けたか　PHP新書（光武誠著）

読んで大部分引用しました。

「島津の退き口」を語るにあたって『旧記雑集』という資料を忘れてはならない。膨大な薩摩藩内関係史料を集成した一大史料集であり、近年『島津家文書』などとともに国宝にも指定された。この史料は関ヶ原合戦、とりわけ「島津の退け口」については宝の山である。

何が宝かというと、退き口に加わり、幾多の困難を乗り越えて郷里に帰還した者たちの書状や覚書が多数収録されているからである。下級士卒たちの目線や息遣いは、四百年たっても色褪せていない。本書ではそれらを大事にしながら、退き口の実態の一端をできるだけ詳細に描きつつ、島津義弘にとって関ヶ原合戦はどんな意味があったかをとらえようとしたつもりである。　（作者　桐野作人「はじめに」より抜粋）

ここからは、「関ケ原　誰が大合戦を仕掛けたか」から　引用

伏見の家康

これから、豊臣秀吉の死去から関ヶ原合戦に至る流れの大筋を書きます。秀吉なきあと、家康が天下人に最も近い位置にいた。誰の目からみても、秀吉の子秀頼とその側近たちが国

徳川へ

そこで、家康は、次の三つの事件を通じてしだいに権力を拡大していき、関ヶ原合戦の直前に半数以上の大名に対して指導力を確立した。

①　前田利家による家康弾劾事件（1599年2月）

慶長4年（1599年）の正月になると、秀頼が伏見城から大坂城に遷った。そして家康以外の四人の大老と三成ら五奉行が大坂城の秀頼のもとにあつまり、秀頼を補佐する形がつくられた。この中心になったのが前田利家である。

政権の中枢が伏見と大坂に分かれてまもない1月21日に、大坂の有力者たちは家康との対立が表面化した。前田利家らの大坂の大老と五奉行が、中村一氏らを伏見に送り、家康が秀吉の遺命に背いたことを詰問したのだ。

糾問使が来ると聞いて、加藤清正　福島正則　黒田如水・長政父子など家康派の大名は、家康の伏見屋敷に集まりその防衛にあたった。家康派の勢力にかなわないと思った大坂の大老たちは、家康に屈服するほかなかった。しかし、この糾問使の事件によって、利家の評判は地に堕ちた。そのため三成ら五奉行は家康と直接対決せざるを得なくなった。さらに、悪いことに、家康糾問事件の三か月後潤三月の前田利家が病死してしまうのである。

② 石田三成の失脚（1599年潤3月）

武将派の諸大名が前田利家の逝去を機に石田三成を討とうと大坂で決起した。この行動に出たのは、加藤清正　浅野幸長　蜂須賀家政　福島正則　藤堂高虎　黒田長政　細川忠興の7人である。

7人はいずれも朝鮮出兵の論功行賞で、三成に不当な扱いを受けたことを恨んでいた。前田邸で襲撃計画の知らせを聞いた三成は、伏見に走り家康に保護を求めた。このとき、家康て隠居

③ 家康暗殺未遂事件（1599年10月）

前田利家の逝去と三成の失脚とによって、家康は伏見城西の丸に入って、思いのままに政治を動かすようになった。そして、毛利、宇喜多、上杉、前田利長の大老は政策決定に関わらせてもらえなくなった。そのため、大老たちはつぎつぎに帰国する。その年9月に、家康の独裁体制を強化する事件が起こった。家康が9月9日の長陽の賀に出席するために大坂城に出向いたとき、五奉行の一人、増田長盛が家康暗殺の謀議を家康に知らせた。

長盛が言うには、前田利長が五奉行の浅野長政と土方雄久、大野治長の三名が大阪城康を襲撃しようと企んでいるという。土方と大野は淀殿のお気に入りだ。家康は、本日らに身辺を厳重に警護させて儀式に臨んだ。

そして事が終わったあと、土方、大野は流罪に処し、浅野長政を隠居させた。さらに謀反の疑いを言い立てて、前田利長を責め、母の芳春院（まつ）を人質として江戸に送った。この事件によって利長は、これから自分の母を預かる家康についていくほかなくなり、家康に接近した。

また、この事件は、家康が思いのまま大名を処罰する権力を持っていることを天下に示すこのになった。いずれの事件でも、家康は周到な動きをした。

毛利家や上杉家の家臣たちは、この流れが面白くなかっただろう。そこで、上杉の家老、直江兼続は周囲の小勢力を征服して会津政権をつくろうとした。国内を統一して長期にわたる平和を実現させようと考える家康には、この動きが許せない。そこで家康は、自派の大名たちに呼びかけて大軍を組織し、会津征伐にむかった。

ここからは、「関ヶ原　島津の退き口」から引用してあります。

慶長5年（1600年）5月

家康は大坂城で豊臣秀頼と会見し、秀頼から政宗の脇差、名物槍柴肩衝、黄金2万両、米2万石を拝領した。これより、家康の会津出陣が豊臣政権による逆賊追悼の戦いになった。

6月6日

家康は大坂城西の丸に諸大名を招集し会津攻めの部署を定めた。

6月16日
家康は大坂を出発。
6月17日
伏見城に立ち寄り、千畳敷奥座敷で諸大名に引見した。留守居を鳥居元忠・松平家忠・内藤家長にする。
7月11日前後
石田三成は居城の佐和山城で大谷吉継や安国寺恵瓊と謀議（ぼうぎ）の末、毛利輝元を戴いて挙兵し、大坂城を制すると打ち合わせた。
7月12日
大坂や伏見で軍事行動が開始された。三奉行の長束正家・増田長盛・前田玄以の連署により、広島に帰国している毛利輝元に上坂を促す書状が送られた。
7月15日
島津義弘が西軍に加わらざるをえないという決断の背景には、伏見城内にいる人質の島津本宗家の家督を継いだ忠恒の夫人亀寿の存在があった。
7月17日
毛利秀元（輝元の養子）が兵を動かし、家康の御在所だった大阪西の丸に乱入し占拠した。
同日、三奉行の連署により、「内府ちがいの13か条」が発せられた。
一、五大老の1人、前田利家が病死した後、その子利長の母親を人質に取った。
一、上杉景勝には何の落ち度もないのに征伐の出兵をした。
一、大名の知行には関与しないという約束に背き自分に都合の良い者にだけは、知行を与えている。
一、伏見城から留守居のものを追い出して占拠した。
一、10人（五奉行と五大老）のほかには誓紙を取り交わさないという取り決めを破って勝手に交換している。
一、政所様（豊臣秀吉の後室）を大坂城西の丸から追い出して、自分が居住している。
一、西の丸にも、御本丸と同じように天守を設けた。
一、諸将の妻子のなかで自分がえこひいきするものだけを国許へ帰している。
一、かつて縁組をしてはならないという誓約に（家康が）背いたので、それを2度としないとたしなめられて承知したのに、そのことを無視して相変わらず画策を進めている。
一、10人が揃って連判するべき文書に1人で署名押印している・・・・・・
等など徳川家康の自分勝手な行動を咎めた上で、「今回の会津出兵は、数々の誓約に違反し太閤様のお指図にも背き、秀頼様を見捨てて出陣したのであるから、われわれは相談の結果、武力を以って彼を制裁することとした。これに同意される諸将は来て参じて秀頼様に忠節を尽くすべきである」と宣言しています。このとき秀頼はまだ8歳でした。
注：会津出陣する大名は1万石につき300人、上方を守る大名は1万石につき100人という基準（秀吉存命中の軍役体系）がり、軍役数となる。
同日、細川忠興夫人（ガラシャ）自害

7月18日
石田三成は軍勢を率いて、秀吉の命日に豊臣廟に参詣する。
7月19日
伏見城攻撃始まる。戦場になる前に亀寿を遅くとも7月29日までに大坂に移している。
注：義弘は、天下分け目の戦いに積極的に関与するよりも、その立場は上方政局のいかんよりも、亀寿の安全を図ることが、義弘・忠常の政治生命を維持するという内向きの心のうちがあった。
注：義弘は7月14日から決戦直前の9月7日までに11通の軍勢催促状を国元に送っている。義久・忠恒は義弘の懇請をことごとく黙殺し、組織的動員はなかった。わずかに義弘の家臣か有志が小人数で上がってきただけであった。
注：7月中ごろの兵数は籏下士卒200余人で200人に満たない。8月20日にはわずか1000人の内ほどに増えている。甥にあたる豊久の軍勢が300人弱加わったことになる。豊久は5月12日、参勤交代のため上京し、7月12日に帰国の許可が出ていたが、帰国が困難になり、義久と行動を共にしていた。
結局、9月13日には1500人程度と推定される。
8月1日
西軍の小早川秀秋・宇喜多秀家・毛利家・石田三成の軍勢は10日以上かって伏見城攻略。島津軍は22人討ち死を出す。
伏見落城ののち、西軍は伊勢・美濃・北国の三方面から進出する。
伊勢口：毛利秀元・宇喜多秀家・小早川秀秋・長曾我部盛親・立花宗茂・小早川秀包（ひでかね）・筑紫広門・脇坂安治・長束正家など
美濃口：石田三成・織田秀信・島津義弘・小西行長・稲葉貞道など
北国口：大谷吉継・木下勝俊・同利房・戸田重政・福原長尭・小川祐忠・生駒親正（名代）・蜂須賀至鎮（よししげ）など

8月15日に島津勢は佐和山に一泊。8月17日に垂井宿（府中）に到着。
8月20日大垣城に入る。ここには、石田三成・小西行長らがいた。
8月22日三成の命により、島津勢は墨俣の渡しの守備につく。
一方、6月16日、大坂城を発した家康は7月2日に江戸に着き、21日に江戸を発して24日に野州小山に着陣した。嫡男秀忠率いる先手衆は宇都宮に布陣している。
7月25日
小山評定が行われ、翌26日、福島正則をはじめ諸将は続々東海道から西上を開始する。一方、秀忠は宇都宮に留まり、一か月以上、上杉方を監視していたが、信州を平定せよという家康の命を受け、8月24日おおよそ3万7千が宇都宮出発、栃木、太田、高崎と中山道を上る。8月28日松井田9月1日軽井沢、2日には小諸着。このとき軍議が開かれ上田城の真田昌幸のことが議論され、帰順を進めることになった。昌幸からの好返事のないまま、5日には戦いが始まり、10日間釘付けになったばかりか、上田城を攻略できず、ここへ家康から「ただちに西上すべし」という催促状が届き、西上を再開する。13日諏訪、17日妻籠、18

日落合、19 日赤坂、ついに関ヶ原戦に間に合わず 20 日大津城にて、家康と合流する。

8 月 11 日
東軍先手衆が福島の居城である尾張清須城に入る。

8 月 23 日
西軍の拠点である岐阜城を攻め、一日で陥落させた。同日夜、墨俣に詰めていた島津勢は火の手が上がっていることを視認した。

8 月 24 日
岐阜城攻めに間に合わなかった黒田長政・藤堂高虎・田中吉政などは墨俣の上流に合渡という渡し場を撃破し、長良川を渡り、大垣城北西の岡山に陣取った。
その日の日没、島津義弘は大垣城の近くに陣をとり、翌日大垣城にいる石田三成に会っている。

9 月 13 日
朝、国許からの待望の加勢が大垣にたどり着いた。家老の長寿院盛淳と蒲生衆と帖佐衆を含めた山田有永ら 70 人ばかりである。陣中には兵糧がなかったので、13 日、14 日の両夜、夜陰に紛れて苅田をして食料とした。特に、14 日の夜は大雨でことのほか寒く、刈ってきた稲穂を積んで火をつけて暖をとった。

9 月 14 日
9 月 1 日に江戸を発した家康本隊は 2 日藤沢、3 日小田原、4 日三島、5 日清見寺、6 日島田、7 日中泉、8 日白須賀、9 日岡崎、10 日熱田、11 日清洲に到着した。3 万 2 千の大移動でようやく美濃赤坂に到着した。東軍先手衆と合わせると 7 万前後になる。江戸にいたとき敵味方関係なく 120 近い大名武将に書状を複数送り全部で 500 通を超えていた、味方には褒賞を約束し、一層の奮発を促す。敵には寝返り裏切りをするように勧め、莫大な加封を持って誘う。東軍に味方することが難しければ、合戦の際に戦わず、戦況を傍観するだけで本領安堵を保証する書状であった。
一方、同夜、西軍は大垣城で軍議を行い、東軍の西進を阻止するため、陣を関ヶ原に移動することを決める。転陣が決定された後、豊久が三成の陣所を訪れ、義弘様の意向である内府の旗本へ夜軍を仕掛けることが良いと伝えている。このとき、三成の家老の島左近に反対された。（注：この逸話は島津方の資料の中に記事がない。桐野作人説）

9 月 15 日早朝（西軍の布陣状況）
大垣城を 14 日午後 7 時頃、石田隊・島左近隊、島津隊、小西隊、宇喜多隊と順に移動を開始し、早い隊は午前 2 時、遅い隊で午前 5 時に石田隊（三成 41 歳=5800 と豊臣家家臣 2000、島左近 61 歳または勝猛、蒲生郷舎、島津義弘 66 歳＝800）は笹尾山麓に、小西行長

43 歳=600 は天満山北に、宇喜多秀家 29 歳-17000 は天満山南に陣所を取る。また、島津豊久 31 歳=850 は豊久隊と小西隊の間に陣を構える。

9 月 3 日敦賀城を出て、北庄城を経てから、大谷隊（吉継 42 歳 1500、平塚為広 360、木下頼継 750、戸田重政 300）中山道一帯に先に着陣

9 月 7 日に毛利隊（秀元 22 歳 16000、吉川広家 40 歳 3000、安国恵瓊 63 歳 1800、長束正家 39 歳 1500、長曾我部盛親 26 歳 6600）南宮山麓に陣を取る。
9 月 14 日伏見城を出て、鈴鹿峠を越えて、小早川隊（秀秋 19 歳 15600、脇坂安治 47 歳 990、朽木元網 52 歳 600、小川祐忠 2000、赤座直保 600）松尾山麓に陣を取る。

9 月 15 日午前

島津勢は三成の「二番備え」「後陣」または「脇備え」位置している。
義弘は開戦後、家来の長寿院盛淳と毛利覚右衛門を三成の陣所に遣わし、「戦場の行」すなわち作戦について打ち合わせて臨戦態勢で待機していた。

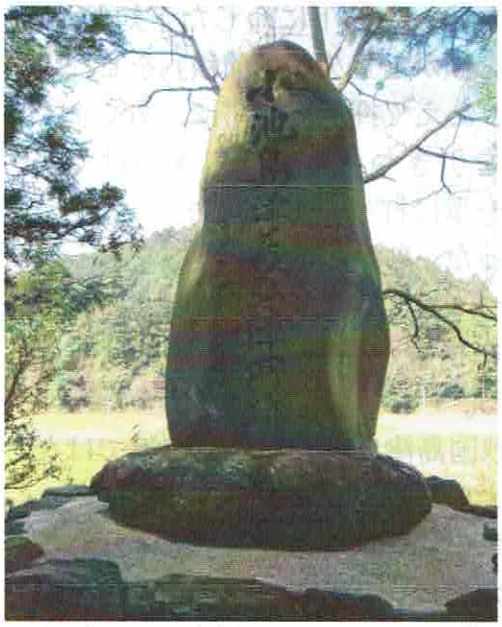
合戦中、三成の家臣八十島助左衛門が進軍を命じようとして島津軍先手の豊久の陣所に二度やってきた。豊久は形だけこれを承諾したが、一人も兵を進めなかった。山田有栄の手記によれば「馬上より口上不行き届きに

候、討ち取り候へと悪口申し候へば、即ち駆け戻り候」勝つか負けるかの非常時のため、焦っていた八十島は軍法を守る余裕がなかったのである。義久・豊久は決戦の戦機は自分で判断する。他人の指図は受けないという確固たる信念を持っていた。

八十島では埒（らち）が明かなかったため、今度は三成自身がやってきた。

三成は豊久に「形成が芳しくない、一刻も早く押し出してくれ」と参戦を促した。

「今日においては自他、各々の武勇を励まし、筋力を尽くさん。この勝敗する所は、これを知るべからず。天運の到来すべき所を待たん」とい豊久は答えた。



三成はそれを聞いて、「気力減じ、勇敢衰えて、そうか、好きにせよ」と答えるのが精一杯だった。それは三成が豊久の陣中を訪れたのは、小早川勢の裏切りのあとだったようである。しかし、島津方は小早川勢の裏切りの時点で勝機はさったと判断し、いまさら三成に従う義理はないと突き放したと考えられる。

9月15日正午頃

三成は島津氏との交渉がうまくいかず、悄然として陣所へ帰り着いた頃、石田勢は敗軍したと山田有栄（ありなが）の手記には書いてある。また、義弘の有力家臣の覚書にも「防戦しようなく島左近即時に敗軍すれば、石田軍皆敗れて敗北す、然れば午の刻の事か」とあって、正午頃にはすでに石田勢が総崩れになっていたとある。

このことと小早川秀秋の裏切りとの因果関係は不明である。島津勢は西軍敗北を冷静に見極めると、次の行動に移った。

島津の退き口の開始

「薩摩勢五千召し列（（つら）ね候わば、今日の合戦には勝つものと）義弘は豪語した。義弘は退き口のときまでずっと甲冑を着けず、子具足姿のままだった。

味方が寡勢、敵は大軍という切羽詰まった戦況で、義弘は背後の伊吹山方面に逃げるのでなく、前方を突き破って故国へ帰ろうと考えた。一見、非常識でありえない戦法だが、わずかな可能性に賭けるしかなかった。

義弘66歳はその自記で「老武者のため、伊吹山の大山を乗り難し、たとい撃たれるといえ

ども、敵に向かって死すべし」と思ったと回想している。

そして、義弘や豊久は寡勢のため、通常とは異なる戦い方を考えていたと思われる。「敵勢寄せ来たり候前に、此方お下知には、いかに間近に寄せ付け候て一戦なさるべしと、鉄砲前積にお射ち候」と部下に命じた下知だが、先手を預かる豊久は「前積」をしないまま、あえて押し出さずに、あくまでも敵を引きつけるだけ引きつけてから、一挙に打って出る戦法をとった。島津勢はその戦機をじっと待ちつづけ、兵力を小出しせず、いたずらに損害が増えることを避けたのである。

注：戦国島津氏では鉄砲は足軽ではなく武士が撃った。「騎馬組」はいない。島津家中においては、衆中と呼ばれる武士たちは一人も残らず、自身で5，6匁（約19ｇ～23ｇの弾丸）玉の鉄砲を携帯し、郎党には6、7尺ほどの持ち鑓（やり）か鎗（やり）・弓矢・太刀を持たせていた。敵と開戦すると、まず武士たちが「繰り抜き（交互）」で鉄砲を放つ。それが一段落したら、郎党に待たせた武具を持って敵に突入する。これが義弘の軍法の流儀であった。しかし、豊久が「前積」をしなかったために、鉄砲をわずか2回放つしかできず、ほとんど活用できなかった。

すでに石田勢も宇喜多勢も背後に敗走した。島津勢だけが戦場で孤高を保っていた。東軍は両勢を追い崩した勢いで、島津の陣中に矛先を向けてきた。陣中に発砲を禁ずる軍令が出ていた。だから、島津勢は一糸乱さず静まりかえっていた。島津勢の先手は豊久で、その右備えには山田有栄がいる。

敵が眼前に迫った。家来の赤崎丹後が「時分よく御座候」と告げたので、当年31歳の豊久は馬上の人となった。折伏しているところへ、敵が間近に近づいたと見るや、筒先を揃えて一斉射撃をした。敵がバタバタと倒れるが、敵が湧くように押し寄せてきたため、次弾を放つ暇がない。敵味方入り乱れてしまったので鉄砲が役に立たなくなり、みな刀を抜いて前方

に出た。山田有栄の手記によれば、敵味方とも識別のため合言葉を使っていたが、敵方の合言葉が「ざい」で、島津方のそれも「ざい」だったため、乱戦の中でよく敵味方を間違えたという。3，4百メートルほど進むと、敵影が薄くなった。東軍諸勢は西軍の石田三成・宇喜多秀家を追うことに夢中になり、島津勢にかまう武将が少なかったのも幸いした。

有栄は常に豊久の馬標を見てその位置を確かめながら戦っていたが、いつの間にか豊久の姿を失ってしまった。有栄は引き返したとき、赤崎丹後と巡り合った。すると、豊久の乗馬とおぼしき馬がやってきた。主人は乗っていなく蔵つぼに大量の血が残っていた・二人は「さては豊久殿戦死疑いなし」と直感した。

義弘が東の方へ押し出したのは、当初から伊勢街道めがけて南下したわけでなく、方角的には大垣城がある。しかし、南宮山の麓辺りで大垣城の本丸に火の手が上がるのが見えて断念したらしい。そこ後、山田有栄が義久の馬標である熊皮の一本杉が揺れているのを見つけたのである。有栄は二十余人を率いており、義弘主従を守って伊勢街道をめざした。

ここで、豊久と長寿院盛淳の最後を記す。

9月15日の決戦当日、豊久は島津軍の先手として最前線にあった。東西の激突が一刻（約2時間）ほどつづいた頃、隣接する石田三成の陣所から、三成本人が豊久の陣所にやってきて、島津勢の参戦を促した。そのとき、豊久は次のように答えた（山田晏斎覚書）

「今日のことはもはや面々が手柄次第に働ければよい。御方もそのようにお心得あれ」

豊久は自軍の進退について他人の指図は受けないと、三成の汗督戦を拒絶した。これはおそらく松尾山の小早川秀秋が裏切って大勢が決したためであろう。三成の陣所が崩れたったのはそれからほどなくだった。

決戦に臨んで、豊久は義弘の家老の長寿院盛淳と別れの挨拶を交わした（井上主膳覚書）。

「盛淳は豊久とは別備えだったので、盛淳のほうがやってきて馬上よりお暇乞いをなされた。豊久様が仰せには『今日は味方が弱いので、今日の鑓は付けない』と互いにお笑いになった」

敵味方入り乱れての乱戦となったとき、豊久が義弘に進言した（『本藩人物氏』「天運はす

でに極まれり。終わりを全うすることはかないますまい。我らがここで戦死するので、公は人数を率いて帰国なされませ」義弘がそれでも承諾しないので、豊久は重ねて声を高くして「御家の存亡は公のご一身にかかっていることをお忘れなく」と念を押しして、自らわずかな手勢を率いて、徳川軍に斬りこんだ。その間に義弘主従は辛うじて逃げ切ったのである。

豊久は関ヶ原盆地の南に抜ける伊勢街道沿いの烏頭坂で討死したというのが通説で、同坂の脇には豊久の供養碑も建立されている。また一説によれば、豊久は重傷を負って上石津の樫原あたりで息途絶え、近くの瑠璃光寺に埋葬されたと伝承されている。同寺には豊久のものとされる墓が現存されている。

しかし、先に記述したように、山田有栄と赤崎丹後は関ヶ原宿口あたりで豊久が乗っていた馬をみつけている。のちの記録によれば、豊久は東軍の大軍のなかに駆け入り戦死したという。敵は福島正之（正則の養子）だった。その首級（しるし）を挙げたのは小田原浪人の笠原藤左衛門という。

注：豊久が身に着けていた甲冑は小田原の笠原家に所蔵されているそうです。

注： 佐土原島津氏の菩提寺だった佐土原の天昌寺には過去帳の写しがあり、それには豊久と一緒に討死にした家来たちの俗名が合わせて 35 人記載されている。

また、家老の長寿院盛淳も豊久以上に壮絶な死を遂げている。その場所は豊久同様によくわからないが、義弘の本陣に居残ることを言っている。このとき、盛淳は義弘から具足・羽織・甲を一揃え拝領し決戦に臨み、敵勢をできるだけ多く引き付けることで、義弘の退却を掩護（えんご）しようとし、身代わりになって討死した。幸運にも帰国できた井上主膳は一緒に戦って生き残った蒲生衆に聞いたところ、東軍は 700 人ほどが二度にわたり押し寄せてきた。一度目は撃退したが、二度目は乱戦になった。盛淳は義弘の本陣に残って防いだが、島津の軍兵にもおじけづいたものが多く、反射的に背後の「堀」に逃げ込んだ。盛淳は馬に乗り回しながら悔しがった。東軍が三度目に押し上げてきたとき、「島津兵庫頭死に狂い也」と名乗り、大勢に鑓を突き立てられて倒れた。それを見た郎党たちは遅れまいと、一同 283 人が敵中に切り入った。そのうちの多くは討たれ、わずか 50 人になって伊勢路に向かい落ち延びたという。なお、盛淳を討ち取ったのは松倉重政の家臣山本七助義純だという。（薩摩旧伝集）

盛淳の墓は関ヶ原盆地から伊勢街道を少し行った琳光寺（岐阜県大垣市上石津町）にある。

井伊直政の狙撃場所

通説では、押し出した義弘主従が福島正則勢をかすめて通過したのち、伊勢街道を南下するが、井伊直政が松平忠吉とともにそれを追尾したところを銃撃されて負傷したとなっている。狙撃場所については異説があり、石田三成が敗走して、島津勢の陣所が四方から東軍に取り囲まれた状況で、旗本衆５，６０人が一か所に集まって一合戦しようと決めていたところに、直政が騎乗して押し寄せてきた。「兵庫を打て」と言ったところ、川上四郎兵衛殿の郎党柏木源藤が進み出て、鉄砲で撃ち通せば、落馬した。（義弘の家臣帖佐彦左衛門宗辰覚書から）

直政は島津勢の陣所近くでその前面にたちふさがったところを狙撃されたのである。この

ことは同時に、退き口に移った義弘主従は組織だった追撃を受けていない可能性が高いことを示している。

なお、本田忠勝の愛馬「三国黒」を島津勢に鉄砲で撃たれている。その後、家来の梶金平の馬に乗り換えている。

注：井伊直政の狙撃者は、徳川氏の史料によれば、押甲江兵衛、大野将監、和田源蔵、川上久右衛門など、さまざまである。

義弘、戦場から離脱する

義弘主従が山田有栄と合流したのち、大垣城行きを断念した主従は大きく南に進路を変えて、伊勢街道をめざした。このとき、前進して中山道と伊勢街道の辻のあたりに布陣していたと思われる福島正則勢の横を「えいとう・えいよう」と声を上げて切り通った。

ようやく危機を逃れたと思ったがもつかの間、一難去ってまた一難、今度は何と、徳川家康の本陣とぶつかりそうになったのである。家康はこの日早暁、南宮山に西麓の桃配山に本陣を置いていた。家康は合戦たけなわの頃、督戦のために桃配山から本田忠勝の陣所まで前進して、勝ちを確信すると、中山道を不破の関方面に進んで、盆地の中央に出ようとしていたのである、先頭を進む山田有栄は家康の本陣だと察知した。（山田晏斎覚書）

これは、北国脇往還を南下する義弘主従と、中山道を佐和山方面に西進する家康本陣と遭遇したのである。しかし、家康本陣を通るのをやり過ごしたので事なきをえたのであろう。

駒野峠越え

義弘主従は幾多の犠牲を出しながら、関ヶ原盆地から伊勢街道を一路南下した。途中、撤退しようとする長曾我部盛親や長束正家の軍勢と遭遇し、前途を塞がれることになった。その頃には東軍の追撃を振り切っていたのだろう。

注：このとき、家老の伊勢貞成を両陣所に派遣して様子を探らせた。両勢が敵か味方か不明だったので、貞成はもし敵なら中に駆け入って討死する覚悟、もし味方なら「ざい」を振って合図すると取り決めた。貞成が長束陣中に入ると、采（さい）振ったので味方と判断し、無事通過できたという。その際、どちらが先に撤退するか話し合い、長曾我部勢が大勢なので混雑をして時間がかかるから、義弘主従が先に撤退することになった。（山田晏斎覚書）

また、正家が親切にも道案内のため一騎を付けてくれた。正家は関ヶ原から比較的近い水口城主である。義弘主従が養老山地東麓の駒野坂に達したのは合戦当日 15 日の夜六ツ半（午後 7 時）だった。ここから義弘主従はなぜか進路を変更し、平坦な伊勢街道でなく養老山地を横切る駒野越えを選んだ。駒野の先には東軍の高須・長島など諸城があり、その勢力圏に入るのを避けたのだと思われる。

申の刻（午後 4 時頃）に義弘主従は追っての心配をしなくてよくなったから、安心して空腹を覚えたのだろう。帖佐彦左衛門が食料の調達を命じられた。彦左衛門は家来・郎党数人を連れて、近くの村に入った。そして 50 人ほど賄いを村人に頼んだところ、意外と快く引き受けてくれた。ところが賄を持っている間に方々の村から村人が出てきて「漏らすな、討て」と罵（ののし）りながら彦左衛門を阻止しようとした。自分は殿様を守護する役目があると思い、賄いを待たずに先を急いで義弘主従に追いついた。

その後、山中に分け入った義弘主従が駒野峠に達したのはその日の四ツ時分（午後 10 時頃）でもう真っ暗だった。付き添う人数は 50 人程度で、駒野越えの前その夜、義弘主従がどこに宿泊したか不明である。（推測：峠の上か、峠を下った西麓いなべ市北勢町あたりか）

9 月 16 日から 9 月 21 日

翌 16 日早暁、義弘は長束正家が付けてくれた道案内の武者に礼を述べて返した。あとは自分たちで進むだけである。

桐野掃部覚書抜書によると、義弘主従がたどった行程は大筋で明らかになった。すなわち、

16 日　駒野越えから伊勢路をとった。通りがかりの村に食料調達に出かけた。彦左衛門は次のように頼んだ。

「相模国の者だが、昨日の合戦で負けた石田方の残党を追っている。このあたりは初めて通るから、道に迷って夕べは野宿したので飯を食っていない。50 人ほどの賄いとして粥を用意してくれないか。望みどおりに金は出す。どうだ」

村人はお安いご用だと引き受けて粥を焚いた。代金として彦左衛門が所持していた銀子一枚を亭主に渡した。

17 日　関地蔵から鈴鹿峠を越えていったん近江土山まで達した。義弘が京都に入るつもりだったからである。しかし、すでに家康が入京したという噂が流れていたので、入京は無

理と判断し関地蔵まで引き返して楠原を経由して伊賀上野に入った。（神戸久五郎覚書）。すると、上野を過ぎた頃、里人4、5百人が落武者を討ち取ろうと弓・鉄砲で撃ちかけてきた。義弘はそれを見て「一人も打ち漏らすな」と命令した。50余人が一斉に抜刀して斬りかかり、里人たちを追いまくった。一度上野引き返して、城の大手に首を懸け、生け捕りの二人を柵に縛り付けて、再び道を急いだ。

この日は山田有栄が食料調達を任せられた。お供衆がくたびれ果てたので、村で食事を作らせようとしたところ、村人が引き受けてくれて、「きりよせ（天井裏）」から、米を運んで食事を作り、お供衆はみな庭で食べた。ところが代金を払う段になって、義弘の所持する「お遣い銀」がないということがわかった。そこで有栄が自分の太刀の金造りの鞘をはずして差し上げ、それで支払った。有栄は鞘の代わりに紙をこよりで巻き、なめしの引き籠に差し入れて、そそまま国許まで差していった。

翌18日には伊賀上野から国境を越えて近江国甲賀郡の信楽郷に夜入った。（新納忠元勲功記）。その晩、「過分に銀子をやるから和泉まで道案内してほしい」と村人に頼んだ。しかし、家の亭主は「銀子をいかほど下されようともできないから、早く帰ってほしい」と追い出した。しかし、女房と隣人が起きてきて「何たる狼藉者か」と騒ぎ出した。収拾がつかなくなり、女房と隣人を打ち果してしまい、縛り上げた亭主に道案内させて、和泉の方へ向かった。

19日　義弘主従は信楽から木津川沿いに下って、笠置山から木津の渡しを経由して西進し、生駒山地を越えて飯森山に達した。義弘主従は飯森山から大坂には向かわないで、平野を経由して住吉をめざした。これは大坂の情報がまったくなく、すでに、東軍方が占領しているか、また亀寿や宰相殿が無事であるかどうかも不明だったから、とりあえず住吉にいる

知友の田辺屋道与という商人を訪ねて情報を集めようとした。平野に達したとき、義弘は家来に暇をとらせて、「大坂に亀寿様や宰相殿がいるので、そちらに奉公すればよい。」と大坂行きを勧めた。

20日　住吉に着くと、義弘は「住吉の築地」の中に入り、ある「明寺（空き寺）」に入った。「住吉の築地」とは、住吉が住吉神社の門前町であり、自治都市として四方を土塁でと塀で囲まれていたと思われる。「明寺」には大勢が入れなかったから、家臣5人を連れて入った。そこへ、先日大坂に放っていた「山くぐり」（諜者）が帰ってきて、亀寿様も宰相殿も何事もなく元気であることを報告した。そのため、義弘は大坂に行くことに決心した。ついては、お忍びでないと入城は難しいので、多人数ではまずいということになり、義弘はわずかな人数で道与宅に向かい、入城の方法を考えることにし、残りは大坂に向かうことになった。動与宅に到着すると、二人は「船の談合」をした。動与は船を所有していないから、大坂行きや帰国が難しい。そこで、動与は堺商人の塩屋孫右衛門を紹介することにした。義弘がわずかな供廻りを連れて堺に入ってみると、すでに東軍の支配下するところとなっていた。落武者狩りが行われ、落人が毎日5人、十人と斬られるような厳しい状況だった。義弘たちは孫右衛門の屋敷から裏に入り、土蔵に潜伏したのは夜のことである。

注：義弘は住吉まで自分の愛馬を連れて来ていた。それは青毛で名を「紫」と言った。船に乗って帰国するとき、愛馬はつれていけないことになって、堺の住吉大明神に奉納した。（神戸久五郎覚書）

21日　義弘は道具衆の横山休内をひそかに大坂に遣わした。駒野越えのとき、休内が義弘の脱ぎ捨ては鎧を拝領したのを持って、亀寿付きの有川貞晴と広瀬吉左衛門に会って見せた。義弘が境に潜伏していることを知らせると、亀寿はうれしさのあまり、休内を印見して盃を与えたほどである。休内はその夜、桐紋付の箱（義弘の鎧入れ）を背負って木津川に繋留してある島津家の御座船に届けてから堺に戻った。義弘は大坂の島津屋敷に堺に御座船を遣わすように命じ、夜には港に着いていた。

注：9月18日　石田三成の居城佐和山城落城
　　9月21日　石田三成　近江古橋村で捕らえられる
　　10月1日　石田三成・小西行長・安国恵瓊　京都六条河原で処刑

義弘とはぐれた者たち

退き口は乱戦になっただけでなく、義弘本陣とバラバラになった者たちが相当いた。さらに、伊勢街道に向かう途中で、かなりの数のはぐれ組が生じた。

義弘の家老新納旅庵の家譜によれば、それは300人の多数にのぼった。旅庵のほかに、黄入忠政・入来院重時・本田助丞（すけしょう）などがいた。彼らは進退を決しかねていたところに長曾我部の使番がやってきて、義弘が伊勢路をめざして落ち延びたことを知らせてくれたので、何とか合流しようと先を急いだ。

このとき、旅庵たちがいたのは「伊吹嶽の麓」で、その後「北近江路」をめざしたとある。すでに述べたように、牧田川に遡って、牧田村→一ノ瀬→下多良→上多良→時山から山地に

入り、五僧峠→保月→八重練を経由して多賀壮に着く。そこから多賀街道を通って中山道の宿高宮のはずれに着いたのは旅庵たちだったと思われる。五僧峠が島津越と呼ばれているし、近江高宮近くの河瀬茂賀山城を領していた小林新六朗正祐なる武士が島津家に人々を案内したという伝承を書き留めて家伝がある。この小林正祐の子孫宅には「薩摩　忠平」なる署名に付いた感謝状が残っている。この感謝状は義弘一行ではなく、義弘の本隊からはぐれた旅庵たちが書いたものだと考えられる。このうち、旅庵と本田助丞たちは 18 日に入京し、洛北の鞍馬に潜伏した。しかし、翌 19 日には徳川方の山口直友の手に捕縛されてしまった。旅庵と助丞はこののち、義弘の罪なきを釈明しながら、京都と薩摩の間を往復し、家康との和睦に奔走することになる。なお、このとき捕虜になったのはほかにも数十人いたと思われる。彼らは大和国三輪山を宿舎にあてがわれていた。旅庵はじめ、長谷場織部佐・川上久智・町田久慶・伊藤院弥六左衛門・本田主水佐・白濱三四郎・川上久重・川上忠兄・黄入忠政・新納新八郎の 11 人とその家来や郎党を含めて、同年 11 月、ほとんど数十人無事に帰国できた。しかし、入来院重時一行は新納旅庵らと一緒に北近江路を通ったが、手勢が多かったせいか、旅庵と別行動をとったようである。そして、合戦から八日後の 23 日、近江水口あたりで不運にも東軍に包囲されてしまい、主従 33 人ことごとく殺された。

9 月 22 日から 29 日までの海路

22 日　早暁（午前 5 時頃）、義弘主従は孫右衛門に別れを告げて、御座船に乗り込み、一路、大坂方面をめざし出交航した。すでに大坂城中の亀寿や留守居の面々との打ち合わせを済ませており、ともに出船して兵庫川口の海上で合流する約束ができていた。ほどなく、午の刻（正午頃）両夫人を載せた船がやってきて無事合流できた。「義弘感悦斜めならず」と両夫人と再会したことを喜んだ。

5 日目の 26 日夜、周防国日向泊　27 日出航、27 日周防国上関泊、

29 日朝　日向細嶋（現：宮崎市日向市）に上陸。

亀寿、大坂城脱出の顛末

関ケ原での西軍の敗戦後、大坂城内では、五奉行の増田長盛と毛利輝元の間で籠城と決していた。さらに、大津城を落とした立花宗茂から籠城して東軍と一戦すべしと詰め寄られたが、結局、次第に毛利方には動揺が生じ、輝元は広島に帰ってしまうことになった。城内亀寿の周辺では策を練り、豊臣家の菩提寺である方広寺の学僧だった仙秀坊を交渉人にして、奉行所に赴き、「義弘公が秀頼公にご奉公して戦死を遂げたから、その人質は国許へ下向させていただきたい」と涙を流して亀寿と宰相との帰国を嘆願したので、ついに、義弘夫人の宰相殿の城外にでる通行手形だけが出された。だが、亀寿周辺では手形は一通で十分だった。城内に亀寿の身代わりを立てておき、亀寿自身は宰相殿の侍女に変装させて城外に連れ出そうという計画だったからである。これにより、無事に城外に脱出でき、手筈とおり島津藩の御座舟に乗り込み海上で合流できた。その際、亀寿は島津家の系図、宰相殿は名物の平野肩

月衝きの茶入れを持参していた。また、一行になぜか秋月種長（日向高鍋）の夫人も同伴していた。秋月種長は関ヶ原合戦では同じ九州衆として一緒に大垣城に籠っていたからか。また、秋月氏領の高鍋は義弘一行が領国に帰る途上に位置しているから、種長夫人を確保しているかぎり、秋月氏領を安全に通過できると考えての同伴だったかもしれない。

注：豊臣政権のとき「公儀」の人質政策に従った形になった。大名が他界した場合、その人質は不要となって帰国が許される。

注：秋月種長は西軍に属して大垣城を守備していたが、関ヶ原の本戦で西軍が壊滅した直後の9月17日、水野勝成の進めで東軍に内応し、同じく籠城していた弟の高橋元種と相良頼房（肥後人吉）を誘って熊谷直盛（豊後安岐）、垣見一直（豊後富来）、木村由信・木村豊統父子らを城中で殺害して降伏。23日には守将の福原長堯は大垣城を開城して東軍に明け渡した。これによって徳川家康から所領を安堵され、高鍋藩の初代藩主となった。

立花宗茂との再会

立花宗茂は秀吉の九州陣の前後に従い、筑後柳川13万石を領した。関ヶ原合戦では積極的に西軍に属した。大津城攻撃の主力となって奮戦し、ついに城主京極高次を降伏に追い込んだ。しかし、その日は9月14日と関ヶ原合戦の前日で、結局、宗茂は本戦に間に合わなかった。西軍の敗北後、毛利輝元に大坂城籠城を進言したが容（い）れられず、帰国することに決した。

帰国となれば、宗茂も義弘と同様、人質問題にぶつかる。宗茂は母宗曇院を人質に差し出していた。大坂城から母を奪い取って帰国しようとした。

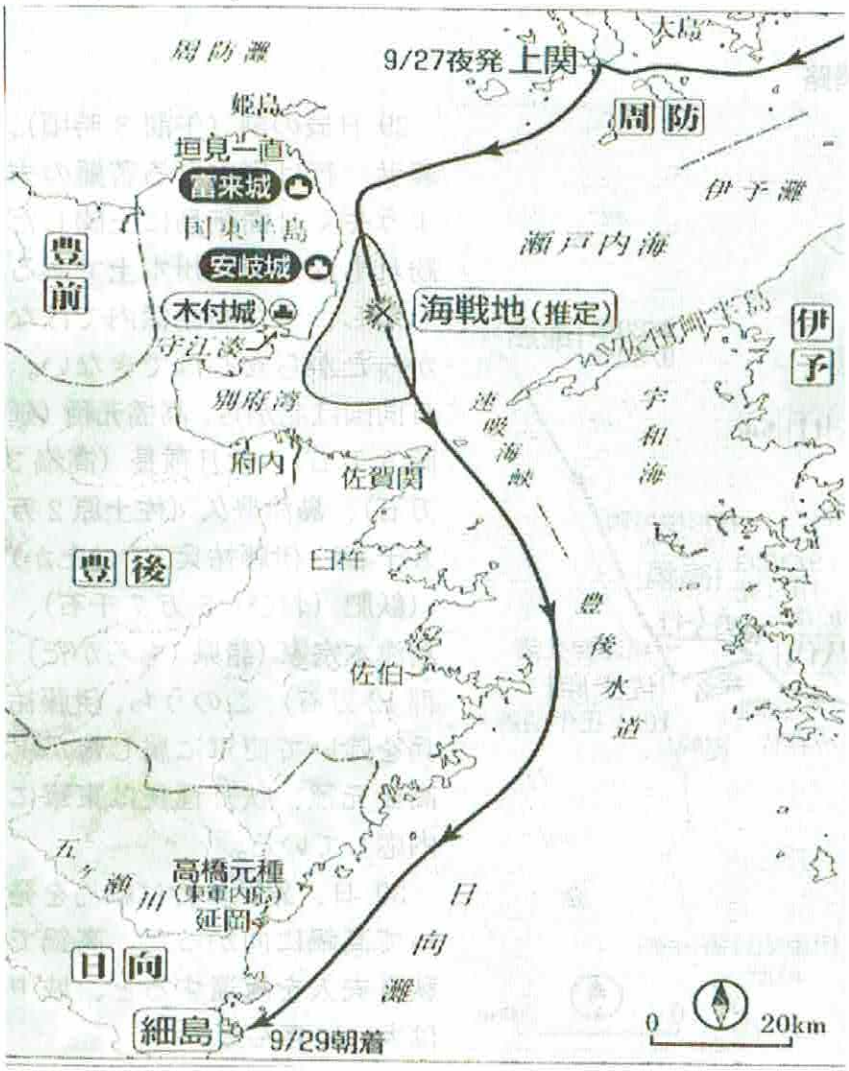
西宮か尼崎の沖で両者の船が遭遇している。宗茂は最初、義弘の船だとわからなかったらしい。十文字の旗を掲げた船が横から来るのを見て、宗茂は加藤嘉明（伊予の国松崎 10 万石）の船だと勘違いした。嘉明の旗印も十文字だったからである。島津氏の家紋が「丸に十字」であることは江戸時代になってからで、この頃はただの十文紋だった。だから、嘉明の家紋と見間違えたのだろう。嘉明は東軍に属していたから宗茂にとって敵になる。

それはともあれ、義弘と宗茂は西宮沖から海路を共にした。出航から 5 日目、周防国日向泊（すおう　ひゅうがどまり：現・山口県大島郡周防大島町）に停泊したとき、宗茂が義弘の船を表敬訪問した。

「喜悦の余り落涙数行、死をのがるるの幸ひを賀し、往時談じ、再会を期して相別れる」

武勇で知られた二人の戦国大名が再会して互いの落涙するほど喜んだというのだから、関ヶ原合戦の苦難はやはり相当なものだっただろう。

注：立花宗茂は 1597 年から 98 年の朝鮮出兵慶長の役のとき、順天城に孤立していた小西行長らを救出作戦に義弘ともに参加して、朝鮮水軍と激戦を戦い抜いた戦友意識から個人的に親近感を抱いていた。また、宗茂が義弘の武辺にひそかに師と考えて尊敬し、模範として学ぶ所があった。



黒田如水との海戦

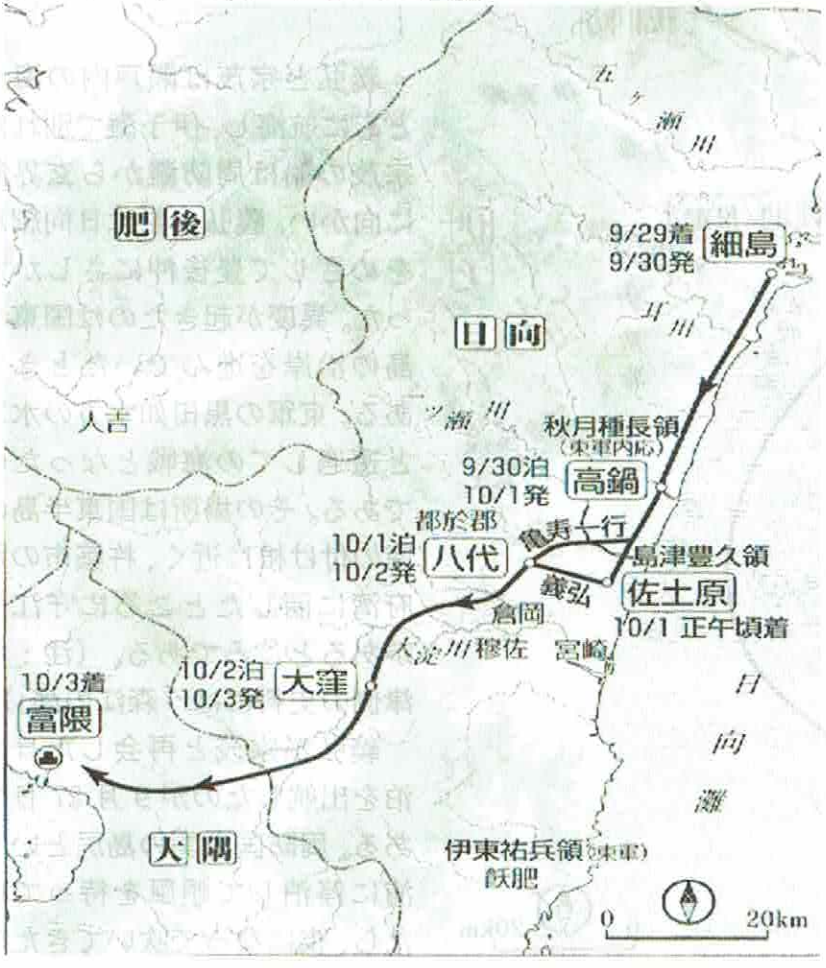
義弘と宗茂は瀬戸内の海をともに航海し、伊予灘で別れた。宗茂の船は周防灘から玄界灘に向かい，義弘の船は日向細島をめざして豊後沖にさしかかった。異変が起きたのは国東半島の沿岸を進んでいたときである。東軍の黒田如水方の水軍と遭遇しての海戦となったのである。その場所は国東半島の南の付け根に近く、杵築市の別府湾に面したところに守江湾があるところである。（注：島津側の史料には「森江の湊」）

義弘が宗茂と再会した日向泊を出航したのが 9 月 27 日である。周防国上関の島尻という浦に停泊して順風を待っていたら、夜になって吹いてきたので出航した。豊後沖にさしかか

った頃にすでに暗くなっていた。島津方の船団は義弘の乗る御座舟の提灯を目印に列になって南下していた。船団は義弘の御座船を含めて最低4艘はいたと思われる。夜が更けて次第に強風になった。闇夜で方角がわからなくなり、共船三艘が遅れ出し、そのうち提灯の火が見えなくなってあいまった。三艘は義弘夫人宰相殿の船、残り二艘はそれぞれ鹿児島方（忠恒）と帖佐方（義弘）の台所船（大名や奥方の家財道具・調度品を積載した船）だった。

三艘は沿岸にかがり火が見えたので義弘の御座船だと思って接近した。ところが、それは黒田方の海上警固の番船だった。夜が明け始めて、島津方の三艘は御座船ではなく陸地の近づいていたことに気がつき、あわてて取り舵（左舵）を切ったが、凪のため、大船のため、なかなか進まない。迷い込んだ島津方の供船が三艘だったが、一艘は黒田方の海上警備網を突破して離脱したのだろう。宰相殿は無事、細島について帰国している。ほかの二艘はあえて残り、黒田水軍と戦った。島津方の二艘には200人ほど乗船していたが、最後には相手方からの火責めあい二艘とも沈没した。両方とも犠牲者がでており、島津方約200人、黒田方54人で甚大な戦死者がでた。かくして、島津方には予想外の遭遇戦となった海戦は午前7時頃から午後4時頃までじつに10時間近い激戦で、海域は南北50キロ以上にわたって繰り広げられ終わった。

9月29日から10月3日までの陸路



29日辰の刻（午前8時頃）、義弘一行は度重なる苦難の末、ようやく日向細島に上陸した。紛れもない南九州本土である。しかし、まだ島津領内ではなかったから安心はできない。日向国は北から、高橋元種（延岡5万石）、秋月種長（高鍋3万石）、島津豊久（佐土原2万8千石）、伊藤祐兵（すけたか）（飫肥（おび）5万7千石）、島津本宗家（諸県（もろかた）郡12万石）。このうち、伊藤祐兵を除いて西軍に属したが、高橋元種、秋月種長は東軍に内応している。

30日、義弘一行は細島を発って高鍋に向かった。高鍋で秋月夫人を返還すると、城中は大いに喜んだ。

注：9 月 30 日　長束正家は水口城に撤退したあと、東軍の武将池田長吉に攻められ、束縛され、開城した。正家は 11 月 5 日切腹享年 39 歳。

翌 10 月 1 日、義弘は高鍋を発って佐土原に向かう。すでに伊藤祐兵の重臣、稲津祐信（清武地頭）が挙兵して前途を塞いでいるという噂が流れていた。一難去ってまた一難である。義弘は念を入れて、亀寿と宰相殿には別行動をたらせ、山手の八代に向かわせた。八代には島津氏領の東端にあたり、仮屋があった。

義弘一行は午の刻に佐土原に着いた。義弘は大坂で人質になっていた豊久の姉を伴っていたので、これを家族に返した。義弘は豊久の老母や夫人に会って豊久の討死を知らせ、見舞いの言葉をかけた。

しかし、伊東方の軍勢がすでに宮崎城（9 月 30 日東軍に支配されている）を乗っ取ったとう知らせもあり、義弘は佐土原をわずか数時間滞在しただけで早々に出立し、南の宮崎方面を避けて西の八代に向かうことにした。ちょうどその頃、佐土原には義久の命で豊久の伯父にあたる老臣の樺山忠助が数十人の手勢を率いて義弘を迎えに来ていた。忠助は義弘に「今日中に通過しないと、一揆衆に道を塞がれるかもしれません」と進言した。義弘も忠助の進言に従い、出立した。八代で一泊した。ここで亀寿様や宰相殿一行と再び合流した。

翌 2 日、大窪村（現：宮崎県都城市高城町）に一泊し、翌 3 日、義久の居城である大隅国富隈（とみのくま）（現：鹿児島県霧島市隼人町）に到着した。義弘のたどったルートはほぼ高岡筋と呼ばれる日州街道を通ったと思われる。

義弘一行はようやく故国の土を踏んだ。関ヶ原を突破した 9 月 15 日から、じつに 19 日ぶりの帰国だった。

10 月 3 日　兄義久と対面

鹿児島湾の最奥部にある大隅国富隈は龍伯と称する大守義久の隠居屋形である。義久は義久一行を迎えるため、わざわざ屋形を出て一里ほどでかけた。そして義弘と見えると互いに手を取って涙を流した。そいてそのまま二人は屋形まで同行した。こととき、義久に従っていた家来は 39 人だった。（神戸久五郎覚書）。彼らはのちに義久から加増された面々で、その中には道具衆や郎党は含まれていないので、実数はもっと多かったのではないか。

兄弟が対面するのは一年数か月ぶりである。久しぶりの対面で兄弟の胸中に去来する思いは何であっただろう。義久の伝記には義久が喜んだと書いてある。

かくして、関ヶ原の戦場離脱から 19 日間にわたって「退き口」は多くの犠牲を払いながら、義弘の帰国によって完遂された。まさに我が国戦史上でも稀な壮挙といってよい。走破距離は海路を含めて千数百キロに及ぶ。

「退き口」はいくつかの幸運も伴ったのは、何より義弘の生き抜くという牢固な意志力と義弘を慕う家臣たちの自己犠牲的な奉公と献身的の賜物である。義弘の帰国はその後の島津家の行く末にも影響を及ぼした。

退き口の死者たち

島津の退き口の総決算の一環として、死者の数を確認しておく必要がある。「殉国名簿」と題した、関ヶ原合戦の死者の名前が列挙した交名がある。すべての戦死者を網羅したわけではないが、小者・中間・夫丸といった軽輩身分の人々の名前も掲載されており、可能な限り調査した形跡がうかがわれる。

9月15日・・・２４６人（２９人）　18日・・・1人　23日・・・３３人（７人）
28日・・・１９６人（１７７人）

死者合計は４７６人。そのうち、武士身分（給人・道具衆など）ではない軽輩身分（小者・中間・夫丸など）は２１３人と約４５％を占める。

２３日は一所衆の入来院重時主従、２８日は相当数が森江沖海戦の戦死者であるとともに、ほとんどが軽輩身分で、１５日決戦の死者も相当数含まれていると思われる。

関ヶ原合戦に従軍した島津氏の将兵がおよそ1500人なら、この交名による死者の割合は三分の一弱である。義弘からはぐれてしまい、のちに帰国した人数も数百人いたと考えられることから、実際はあと数百人の死者があったものと推定される。おそらく、全体の三分の二が戦死もしくは行方不明になったのではないか。退き口がおびただしい犠牲によって遂行されたことを物語っている。

義弘主従を苦しめたもの

退き口のもうひとつの特徴として、堺・大坂にたどり着くまでの数日間で義弘主従を苦しめたものが二つあった。それは東軍の追っ手ではない。東軍の追撃は関ヶ原の戦場で終わっており、伊勢街道に入ってからはなかったからである。では何かといえば、ひとつは飢えであり、もうひとつは途中で遭遇した村の人々である。

飢えをしのぐには途中の村から食料を調達しなければならない。村人が同情的もしくは協力的なケースは稀である。ほとんどの村にとって落武者は村人の生命・財産を脅かす潜在的な侵入者か外敵である。義弘主従が武器と戦闘能力で一時優位に立っても、村人が結束すれば、たちまち逃走せざるをえないのである。

だから、義弘主従は自分たちの身分を隠たり、下手に出て援助を乞い、また食料の対価を何らかの形で支払うことによって村人との融和を保つ努力をしなければ、退き口を完遂することは不可能だったのである。

義弘主従を支えたもの

義弘が西軍に加担せざるをえなかった最大の理由は嫡男忠恒夫人の亀寿の存在だった。彼女を守り抜くことが、島津氏家中で孤立気味の義弘の政治的立場を守り、忠恒の家督を強化する唯一の手段だったのである。そのために義弘には生き抜いて帰国することが至上命題となった。もし、義弘が死ねば、家督を失った可能性が高い。一方、義弘が生き残っても、亀寿が亡くなれば、義久の激怒を買い、忠恒の家督はたちまち取り消されるだろう。義久には外孫の忠仍（ただなお）という、もう一人の家督候補がいたからである。だから、義弘は自身も生き残り、亀寿も同伴して帰国する必要があったからである。老齢の義弘が心身とも苛酷な退き口に堪えられたのは、ひとえに自らの政治生命と忠恒家督を保持しようという執念だったといえるのではないか。